

# 創学舎ニユース

No.232

## 親子の関係(五七)

「頭がよい」といわれる人達が「成績のよさ」以外の部分では、必ずしも「良い」わけではない。具体例をあげよう。有名な大阪市役所の事例である(他の自治体には触れない)。

市役所に勤めているといえ、地元ではいわゆる「エリート」である。当然「頭がよい」といわれる人達である。難関である公務員試験に合格し、複雑であると思われる仕事をこなしているのだから、「成績はよかつたはず」「だし、一定の処理能力を備えているはず」である。しかし、新聞やテレビを含めた複数のメディアの報道によれば、次のような厚遇をつけているという。

年に一度の観劇・CDラジカセなどの家電製品の配布  
退職手当・年金の条例に規定のない割増支給  
(一人約三八〇万円)

市長部局職員の生命保険掛金の市負担制度  
職員等の親睦団体への助成(年約一〇億円)  
係長以下の職員の三年に一度の公費負担によるスーツの支給(年約四億円)

特殊勤務手当を、水道局・交通局職員への一律支給

因みに、大阪市の財政は累積赤字で五兆六千

億円ほど。その中で、市民の税金から前記のような支出(年間一〇〇億円以上)が長年にわたってくり返されてきた。当然、市民の反感は強く、「即時廃止」と過去にさかのぼっての返金を要求する声も多い。しかし、大阪市職員は、「一方的に犠牲」を強いるものと反発、連日の交渉が続いている。

さて、「どこで問題である。」「この職員の人たちは、頭がよいか?」よく考えてもらいたい。公務員の模範たりうるか考えてもらいたい。自分の子供に、こういう勤務の仕方をしてほしいか考えてもらいたい。解答は各自の心の中にある。では、私自身はどうかといえば、なかなか難しい。まず、自分が大阪市の職員であれば、先のような厚遇を、まずいと思いつつも受け続けたらどう。ひよっとしたら、名前を出さない内部告発の形でマスコミを利用していかもれない。いや、全く分らない。

ただ、ひとつだけいえることは、「勉強におけるいわゆる頭のよさ」と「物事の当否を判断する頭のよさ」は全く別であるということだ。確かに「勉強における頭のよさ」に恵まれると、社会的には有利な職に就いたり、そういう立場に立てる可能性が高くなる。しかし、一方で、「物事の当否を判断する頭のよさ」が並であったり劣っていたりすると、有利な立場にいる分だけ、社会に与える害は大きくなる。これは、社会主義とか資本主義とかいった経済のシステムに関係なく、広く当てはまる事実だと思つ。

「こういうことを書けば、」どこでもやっていることだ。「余り極端なことはいわれないほうがよい。」「大阪市には大阪市の事情があるのだ。」「などという声も間違いなくあがってくるだろう。しかし、大阪市のような状況は、日本中の至る所で存在していて、その結果が、国や地方自治体の莫大な借金の大きな要因の一つとなっていることに間違いはないはずである。以下次号

(小林)

## 教育「名言」の紹介(7)

幼い子どもには活動によって感覚的な印象を獲得したいという強い欲求があります。

《出典》マリア・モンテッソーリ  
(イタリア・一八七〇—一九五二)

『モンテッソーリの教育法 基礎理論』

解説 一九〇七年、ローマのサンロレンツォのマルシー通り五八番地(現在も開設されている)「子どもの家」は新しい教育の巡礼地になった。「子どもの家」の特徴は、子どもを観察することによって、感覚的な印象を、活動しながら獲得したいという子どもの教育現実、すなわち「新しい子ども」の発見である。「子どもの家」の「新しい子ども」は、モンテッソーリの考案した、感覚が発達するためのモンテッソーリ教具を、毎日用いる。

「子どもの家」の卒業生は、公立小学校に入学したら、知的に優れた成績を示した。感覚が認識となり、そして感覚教育が明瞭で強い知性を

育てる基礎となっていたことを表した。当時、貧しい社会階層で、非識字の両親をもつ「子どもの家」の子どもたちが、恵まれた家庭環境の子どもたちより、知的にも良い成績を示し、情操的にも幸せで、彼らの人格が調和的発達へ向かっていることが明らかになった。

感覚は子どもと生きる世界の接点である。子供は感覚を通して自分の生きるまわりの世界と関係を保ち、自己自身と外部の世界を理解する。感覚はほつておくとも発達しないが、訓練すると発達する。感覚は私たちの生命維持のために必要で、それ故、適切な刺激を受け、訓練されなければならない。また、感覚がより鋭敏に洗練されると、それによって知性はより明晰(めいせき)に強化される。

感覚の知性化はある時期を逸すると効果が上がらない。特別な能力が与えられている、感覚の鋭敏な時期を、モンテッソーリは「感覚の敏感期」と呼んだ。これはある一定の期間だけ続く。内的な感受性に導かれ、子どもを直接に特別な活動へ駆り立て、さらに進むために必要な他の能力獲得をも可能にする。モンテッソーリの「子どもの家」、幼稚園、保育園に通う三歳から六歳の年齢段階の子どもの発達がこの感覚の敏感期に当たる。

赤ん坊は母の声を聞き、お乳を飲むこと等を無意識にする。小さい子どもは無意識的に識別し、分類し、秩序づけ、漸次性や対照性や類似性を発見する。少しずつ大きくなると、子供は本当

に意識して知るといふ方向へ向かう。そのとき、子どもは知覚や感覚手段として見て、触って、聞いて、味わって、嗅いで、知る。感覚の五感

(マカトス教育研究所)

### 卒業おめでとう

卒業の季節だ。創学舎でも、小中高あわせて三百人以上の生徒が巣立ちを迎えた。小学六年生はほぼ全員が中学部に移行し、この後も続けて塾に通うが、中学三年生の大部分と、高校三年生とはひとまずお別れである。今年の卒業生との思い出も多く、彼らが新しい世界に入っていくのを喜びつつも、一抹の淋しさも感じている。そんな複雑な思いを込めていおう。卒業おめでとう。

ここで、先に生まれたものとしていつておきたいことがある。自分のこれまでの人生を振り返ると後悔することのみ多く、従って余りエラそうなことをいう資格はないのかもしれない。しかし、やはりいつておかねばならない。

生きていくことは大変なことなのである。長い人類の歴史の中で、ほとんどすべての期間、病と死は万人のすぐそばにあった。貧困も日常であった。「自分や友人や肉親が明日死ぬかも

しれない。」と思わなくてもよい生活が、私達やきみ達のところに届いたのはこの数十年のことなのだ。(勿論、今この時にも重い病に苦しむ人も、命をなくす人も大勢いる。そして貧困に耐えている人も大勢いる。)しかし、そういう生活の中にいても、また生きていくことは大変である。手に入れたものは守りたい。もっと手に入れない。人間の欲求は果てしない。死や貧困に満ちた時代のことを若い人達に語っても上手くはいかない。更なる欲求の充足へと人間は進み続けるのである。

そのためには働かねばならない。そして働くということは大変なことなのだ。きみ達の親はその大変なことをずっと続けてきているのだ。そしてきみ達をずっと支えて育ててきたのだ。勤労は国民の義務だなどと生意気をいつてはいけない。子供を育てるのは親の役目だと鼻で笑つてはいけない。確かに当然のことなのだ。しかし大変なことなのだ。だからその点で親を認めろ。

さて、働くとはどういうことか。自分の会社や自分の属する社会に貢献することによって、報酬を得ることである。より多くの報酬を手に入れる為に、同僚や他社との競争は避けられない。法律すれすれの所で判断を下さなければならぬ。法律すれすれの所で判断を下さなければならぬ。クラスの中でいやな人がいたかもしれないが、働く場所にもそういう人はいる。しかも今度は逃げられない。やりがいのある仕事をしたいとみんなが願うが、そういう

仕事に就ける人はごくわずかである。またその仕事の中にやりがいを見い出すのには、大変な努力がいる。創造性を発揮したいと、これまたみんなが思うが、創造性をもった人間は数少ない。仮にもついても、それを形にしていくのは大変な努力を必要とする。自分の会社や同僚が不正なことをしていて、そのことを恥ずかし

とここで、私は、最近、「日本はたかりの国だ。」と思うことがある。国や地方自治体等の借金が数百兆円とかいう話が、あちこちで聞かれる。少し前の話になるが、一九七三年に第一次オイルショックがあつて、翌年に赤字国債が発行され、その後どんどん借金が増えていったのだ。本来の予算の範囲内のお金に加えて、積み積もった数百兆が企業に流れ、それから国民に流れ、国民は、本来入ってしかるべき額以上の金を手にして生活をふくらませてきた。こういう状況の中の虚構の豊かさにおぼれてきたのだ。そして、これから、その虚構の豊かさ

に使われた分をきりつめていかねばならない。そのため、経済の面でもいろんな変動がこれから何度もおこるだろう。その中で、もう少しきみ達が大きくなったら本当の豊かさとは何か考えていつてもらいたい。またそうしなければ

いけない。

最後にある卒業生の話をしよう。彼は、小学校の時から夢を追い続けている。「何かを創造する」仕事だだけいつておこつ。まだ実現の途中にあり、ものすごい貧困の中で努力を続けている。服も靴もボロボロである。親は心配して、援助を申し出るが彼は断る。彼はこういつ。「自分は大学まで親の世話になつた。親にそこまでしてもらえたことに感謝している。そしてまた、こうして一人で生活するようになって、三食きちんと食べられることがどんなに有り難いことか分かり、それをしてくれた親に心から感謝している。こうして心配をかけて申し訳ないが、これ以上頼りたくない。おれはなんとか生きていく。」どうだろう。夢にかけるとはこういうことをいつのだ。私にはそういう彼がともまぶしい。彼が成功するかどうかは分からないが、私は信じている。

さあ、いよいよお別れだ。健康に留意し、心を広く、友を大事にし、家族に感謝し、豊かな趣味を持ち、自分が心から望むものを見つけ、しかし世の中の害になることはせず、道を拓き、自分になれる最高の自分になれ。また会つ日のために、さよなら。(小林)

卒業や転校等で創学舎を離れる方にも、ご希望があれば、創学舎ニュースを無料でお送り致します。在籍した教室までご連絡下さい。